



Title	ユーラシア北東部諸言語の所有を表す接辞の意味論と構文論：導入と総括
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 2, 1-10
Issue Date	2012-03-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49257
Type	bulletin (article)
Note	特集 所有表現
File Information	01ebata.pdf



[Instructions for use](#)

[特集 所有表現]

ユーラシア北東部諸言語の所有を表す接辞の意味論と構文論
—導入と総括—

江畑 冬生

(日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学 AA 研)

1. 特集の趣旨

本特集は、ユーラシア北東部に分布する諸言語の所有を表す接辞について、主に意味と構文の面からの考察を行うものである。ここで取りあげる言語は、コリマ・ユカギール語（以下単にユカギール語、系統不明）、アリユートル語（チュクチ・カムチャッカ語族）、エウエン語（ツングース諸語）、モンゴル語（ハルハ方言、モンゴル諸語）、サハ語（チュルク諸語）の5つである。

これらの諸言語には、日本語の「持っている」や英語の *have* に相当するような所有を表す動詞がない。所有関係を表すには、動詞ではなく、所有物名詞への接辞付加を手段とする。これを図式的に示せば次の通りである： N-**PROP** 「N を持っている」（“PROP” は *propriative* の略¹）。N-PROP は典型的には述語または連体修飾語として用いられる他、言語によっては名詞句や副詞句としても機能する。各言語における PROP は、様々な名詞に付加されうるという点で生産的な接辞である。

先行研究において PROP はしばしば「形容詞派生接辞」と記述される。たしかに N-PROP は主として叙述または修飾を行う。しかしながら、各言語では「形容詞」というカテゴリーの存在が自明ではない²、さらには PROP に典型的な派生接辞には無い特徴が見られる。PROP の形態統語的振る舞いは、単に形容詞を派生する接辞として片づけて良いものではない。一方、PROP の意味については、系統を異にする5つの言語の間に顕著な類似が見られる³。本特集は、5つの言語の PROP の類似を出発点とし、類似点と相違点を比べつつ、各言語の PROP のより精密な記述に迫ろうとするものである。

本特集は、第142回日本言語学会におけるワークショップ『ユーラシア北東部諸言語の

¹ Heine (1997) 等の所有構造に関する通言語的な研究では、「太郎の本」のような *attributive possession* と「本を持っている」のような *predicative possession* を区別する。本特集で取りあげる接辞は *predicative possession* を表す形式である。Stassen (2009) は類型論的観点から *predicative possession* の分類を行うが、5つの言語の PROP はこの分類では *with-possessive* タイプに相当する。本特集では、所有者の人称・数を表す接辞を PROP と区別し「所有者人称接辞」と呼ぶ。

² ユカギール語では、PROP は自動詞を派生する接辞である（形容詞に相当するものは自動詞に含まれる）。残りの4言語では、PROP は形容詞を派生する接辞とされるが、いずれの言語でも「形容詞」を「名詞」と区別することが難しい。

³ ただしエウエン語・モンゴル語・サハ語に関しては、ツングース諸語、モンゴル諸語、チュルク諸語の3つが1つの語族（アルタイ語族）に属するという仮説があるが、学問的に証明された定説ではない。

所有を表す接辞の意味論と構文論』での発表に基づいている。ワークショップにおいて口頭発表を行った4名（長崎，鍛冶，永山，江畑）はそれぞれ，発表内容への加筆を行った。さらに，モンゴル語についての梅谷論文を加えることで特集の拡充を図った。本稿では，特集への導入と特集の総括を行う。導入を踏まえた上で各論文に進み，再び総括へ戻ってご覧いただくことを念頭に本特集は組まれている。本導入および総括の内容は，上記ワークショップに向けた議論および特集の各論文の内容に多くを負っている。

2. 特集への導入

本特集で取りあげる5つの言語のPROPには，特に意味の面で顕著な類似性が見られた。本節では，特集において繰り返し述べられる概念について，予め説明を加えておく。

2.1. 意味的側面

角田 (2009: 158) は，譲渡不可能な所有物を2つに分類すること，すなわち**普通所有物**と**非普通所有物**の区別の重要性を説いた。「頭，目，性格」等の普通誰にでもあるもの（普通所有物）と，「髭，才能」等の誰にでもあるとは限らないもの（非普通所有物）との区別は，本特集で取りあげる諸言語のPROPが表す意味にしばしば影響を与える。特に，Nが普通所有物である場合，単なる所有を表すのではなく，「特別なN」の含意や「Nを豊富に所持」していることの含意がしばしば見られる。

PROPが，単なる所有関係ではなく，所有者と所有物が現に一体的に存在していることを表す場合がある。本特集ではこの状態を**現に所持**あるいは**現に所持している**と呼ぶ。現に所持とは，人間であれば随伴を，物であれば携帯所持していることを表す。携帯所持の場合はさらに，衣服等の着用，道具としての使用，乗り物としての乗用を含意することがある。なお，風間 (1999) および松本 (2007) はPROPの表す意味についての先駆的研究であるが，両研究ではPROPが用いられる際に見られる意味的特徴として「より恒常的な一体感のある所有」や「現に所持している」ことをすでに指摘している。

言語によっては，等位構造を構成したり近似複数に用いられるなど，PROPの用法が狭義の所有以外にも広がっている。

2.2. 構文的側面

PROPは一義的には派生接辞として機能するが，PROPが付加された結果を単なる派生語として捉えるのではなく，構文として捉えた方が有益な場合がある。具体的に言えば，1つはPROPが人間名詞に付加され随伴を表す場合であり，もう1つはN-PROPが述語として現れ所有というよりはむしろ存在を表す場合である。

PROPが人間名詞に付加された場合に，しばしば随伴の意味で用いられる。そこで問題となるのは，**共格構文**との違いである。モンゴル語を除く4つの言語は，PROPとは別に共格の接辞を持ち，共格構文を用いても随伴を表すことができる（なおモンゴル語ではPROPと

共格接辞が同形式である)。そのため、随伴を表す際、PROP を用いた場合と共格構文とで違いはあるのか、どのように違うのかが問題となる⁴。

所有者が人間名詞あるいは場所性を持つ名詞である場合、「N」を所有するというよりはむしろ「N」が存在することを表すことがある⁵。5つの言語すべてに存在文と呼べる構文が別にある⁶。そのため、存在を表す際、PROP を用いた場合と存在文とで違いはあるのか、どのように違うのかが問題となる。なお PROP と存在文との違いについては、風間 (1999) がモンゴル語、チュルク諸語 (トルコ語およびサハ語)、ツングース諸語を取りあげ、情報構造の点から「全体が新情報である場合には存在動詞による構文をとる」と結論付けている。橋本 (2010: 106) はモンゴル語について「存在文に所有を表す例がある一方で、所有文に存在を表す例がある」ことを指摘する。

2.3. 語の形態的緊密性

「N-PROP」は形態論的には派生語として位置づけられる。5つの言語の用例を検討すると、元の名詞語幹「N」の意味と接辞の意味の足し算からは「N-PROP」の意味を導けない例が一定数存在する。このような例は、PROP により新しい語彙項目が生み出されていることから、まさに派生接辞としての特徴を示している。その一方で、派生語の一部に過ぎないはずの「N」だけを意味的に取り出すことが可能な場合もある。このようなケースは語の形態的緊密性 (lexical integrity) の観点からは問題である [この問題は 3.6 節でも論じる]。

2.4. 欠如を表す形式

「持っている」とは対称的に「～を欠いている」を表す形式が 5つの言語すべてに存在する。これを本特集では欠如を表す形式と呼ぶ。欠如を表す形式は PROP 同様に名詞から形成され、意味の上では PROP と対称的である。しかし、その形態統語的振る舞いは PROP との非対称を示すこともある [この問題は 3.7 節でも論じる]。

3. 特集の総括

以下では本特集の各論文の内容に基づき、5つの言語の PROP および欠如を表す形式の特徴をまとめる。

3.1. PROP の表す意味

PROP が表す意味について、5つの言語に共通して次のような特徴が見られた。

⁴ なおモンゴル語では、PROP と共格接辞が同一形態素か否かという議論も成立する。詳しくは梅谷論文を参照されたい。

⁵ 「場所性」とは寺村秀夫の提案する「トコロ性」と同じ概念である。寺村 (1968) はトコロ性を「ココハ____デス」の下線部に入り得る性質と定義する。

⁶ 5つの言語の存在文は次のように図式化可能である: X-LOC Y(NOM) ある「XにYがある」。なお、モンゴル語を除く4つの言語の話者のほとんどがロシア語との二言語使用者である。ロシア語では所有を表すのに動詞 *иметь* 「持つ」を用いることもあるが、存在文を用いて *У меня есть мечта*。「私には夢がある」のように表す方が自然である点にも留意すべきである。

(a) N が譲渡不可能な普通所有物

N に対する修飾語が無い場合には、単なる所有の意味では不自然であり、特別な含意を必要とする。特別な含意には 2 種類がある。N を豊富に有していることの含意には、例えば、ユカギール語・アリュートル語の「毛むくじゃら」(毛-PROP)、サハ語の「金持ちの」(金-PROP) がある。特別な N を有していることの含意には、例えば、サハ語の「良い声をしている」(声-PROP)、アリュートル語の「大きな目」(目-PROP)、モンゴル語の「かしこい」(頭-PROP) がある。

N が普通所有物であっても、N に対する修飾語があれば単なる所有を表す。例えば、エウエン語の「悪い気質の」(悪い 気質-PROP)、ユカギール語の「1 つ目の」(1 目-PROP)。普通所有物に対する修飾語がある場合には、次に述べる非普通所有物と同じ扱いを受けるのだと言える。ただし梅谷論文は、N に対する修飾語が無い場合であっても、文脈によっては N を「単に所有」する文が可能であることをモンゴル語について示している。

(b) N が譲渡不可能な非普通所有物

単なる所有を表す。例えば、ユカギール語の「ひげがある」(ひげ-PROP)、アリュートル語の「角のある」(角-PROP)。

(c) N が譲渡可能所有物

単なる所有を表すこともあるが、しばしば、現に所持していることを含意する。単なる所有を表す例には、ユカギール語の「本を持っている」(本-PROP)、アリュートル語の「夫がある」(夫-PROP)、サハ語の「子供がある」(子-PROP) がある。現に所持していることを含意する例には、次のようなものがある。人間の随伴を表す例は、サハ語の「ケスキルと一緒に」(PSN-PROP)。衣服等の着用を表す例は、エウエン語の「帽子をかぶって」(帽子-PROP)。道具としての使用を表す例は、サハ語の「ボールを使って」(ボール-PROP)。乗り物としての乗用を表す例は、アリュートル語の「カヤックに乗った人」(カヤック-PROP)。携帯所持を表す例は、ユカギール語の「釜(うけ)を持って」(釜-PROP)。

3.2. 所有の恒常性

先行研究には、PROP が恒常的な所有を表すと指摘するものがある [風間 (1999: 121), 松本 (2007)]。しかし実際には、各言語の PROP の表す所有関係は、恒常性が高いものから一時的なものまでさまざまである⁷。アリュートル語の「ゴマフアザラシ」(模様-PROP) のような名詞的用法、およびモンゴル語の「有能な」(能力-PROP) のような恒常的性質を表す用法では、所有関係の恒常性が非常に高いと言える⁸。一方、サハ語の「ギターを弾きながら」(ギター-PROP) のような副詞的用法、およびユカギール語の「呼吸する」(呼気-PROP) の

⁷ モンゴル語については橋本 (2010: 125) が、恒常性について「的外れとまでは言えないにしろ、本質的なものではない」ことをすでに指摘している。

⁸ ただしアリュートル語の「カヤックに乗った人」(カヤック-PROP) のように、名詞的用法であっても所有関係の恒常性が一時的な例も存在する。

ような動作動詞では、一時的な所有関係が見られる。5つの言語の PROP の用法を、恒常性の観点からまとめたものが表 1 である。表 1 では、名詞的用法を最も恒常性が高いものとし、以下順に、恒常的性質を表す用法、一時的性質を表す用法、副詞的用法、動作動詞の順に、より恒常性が低いものとする。これらすべての用法が 5つの言語（の 6つの形式）に揃っているわけではないが、少なくとも恒常的性質を表す用法と一時的性質を表す用法は、どの PROP にもある。従って、PROP が常に恒常的な所有を表すとは言えない。

[表 1] PROP の表す恒常性

	恒常的 ← — — — — — — — — — — — — — — — — → 一時的				
	名詞	恒常的性質	一時的性質	副詞	動作動詞
ユカギール	×	○	○	○	○
エウエン	×*	○	○	○	×
モンゴル	○	○	○	○	×
サハ	○	○	○	○	×
アリュートル L 形	○	○	○	×	×
アリュートル G 形	×	○	○	×	×

* エウエン語にも名詞的用法が存在する可能性がある。詳しくは鍛冶論文を参照されたい。

3.3. 所有からの用法の広がり

PROP の表す意味が、狭義の所有からの広がりを見せることがある。所有以外を表す用法は、「所有者」と「所有物」の関係性から 2種類に分類することが可能である。PROP の用法は本来、意味的にも構造的にも所有者の方が主役と見なせる。例えば、サハ語の「車を持っている人」(車-PROP 人)では、「人」が主役である⁹。ところが所有以外の用法では、所有者と所有物の対等な関係や、むしろ所有物の方が主役と見なせる関係がある。

(a) 所有者と所有物が対等

(a-1) エウエン語の「2 皿の肉」(2 皿-PROP 肉)やモンゴル語・サハ語の「酒の入った瓶」(酒-PROP 瓶)のように、N-PROP が容器と内容物の関係を表すことがある。この関係においては、容器を主要部にすることも、内容物を主要部にすることも可能である。このとき所有者と所有物は、主要部を逆転可能だという点において対等の関係にある。

(a-2) ユカギール語の「ナイフと斧 [を]」(ナイフ [目的語] 斧-PROP)やサハ語の「ヴァーリャとコスチャ」(PSN-PROP PSN)のように、等位構造を構成するのに PROP が用いられることがある。この場合にも、所有者と所有物が意味的に対等の関係である。

(b) 所有物が主役

名詞的用法では、所有者は全く明示されない。例えば、モンゴル語の「ボタンが付いた

⁹ ただし N-PROP が叙述をする場合あるいは副詞句として機能する場合には、所有者が必ずしも構造的に主役とは言えない。

もの」(ボタン-PL-PROP), アリュートル語の「海岸にいる人」(海岸-PROP) などの位置や出身地を表す用法, サハ語の「バフライたち」(PSN-PROP) などの近似複数を表す用法. これらの用法では, 「N-PROP」が意味的にも構造的にも主役である.

3.4. 存在文との違い

N-PROP を述語として用いた場合, 所有というよりはむしろ存在を表すことがある. その結果, 所有構文 (PROP を述語として用いた構文) は存在文と意味的に競合する. 所有構文「～は N-PROP だ」と存在文「～に N がある」の違いは, 次の2点から説明できる.

(a) 譲渡可能性からの説明

風間 (1999) も指摘するように, 譲渡不可能名詞を主語とする存在文「～に N がある」は不自然である. 譲渡可能名詞について, 所有者が有生ならば, 所有構文と存在文のどちらも使える. 所有者が無生の場合, 所有物との一体感, つまり所有者と所有物とが一体的に存在する場合にのみ所有構文を用いることができる. 例えば, 所有構文「この部屋はテレビ-PROP だ」と存在文「この部屋にテレビがある」は両方可能であるが, 前者はむしろ「この部屋はテレビ付きだ」のニュアンスを表す. 以上をまとめると, 譲渡不可能なものについては存在文ではなく所有構文を用いる. 譲渡可能なものについては両方とも使えるが, その表す意味には有生性が部分的に関与する.

[表 2] 所有構文と存在文の違い

	N が譲渡不可能	N が譲渡可能
所有構文	○	○*
存在文	×	○

* ただし所有者が無生ならば, 一体感のある所有を含意する

(b) 情報構造からの説明

長崎論文はユカギール語について, 所有構文は所有者ないし場所を表す名詞句が主題である場合にのみ用いられることを示した. 興味深いことに, 風間 (1999) にも同様の指摘がある. つまり, 情報構造の点でも異なる言語の PROP に共通性が見られることになる.

3.5. 共格構文との違い

共格構文との違いが問題となるのは, N-PROP が連体修飾をする場合または副詞的に用いられる場合のみである. PROP を用いた構文と共格構文との大きな違いは見られず, 両者は置換可能な場合もある. 本特集の各論文では, 両者には次のような違いがあることが分かった. 鍛冶論文ではエウエン語について, 共格とは異なり, 副詞句用法の N-PROP における N が親族名詞である場合, 必ず主語の親族として解釈されることを示した. 梅谷論文ではモンゴル語について, 共格とは異なり, PROP が連体修飾する場合には再帰所属接辞等が付加されないことを確認した (ただし述語を修飾する際には両者の区別が困難になる場合があることも示した). 江畑論文ではサハ語について, N-PROP は連体修飾句として解釈しうが,

共格名詞句は決して連体修飾する成分とは解釈されないことを示した。

3.6. 語の形態的緊密性または N の自律性の問題

本特集で検討した用例の中には、元の名詞 N からは「N-PROP」全体の意味を導けないものがある。例えば、アリュートル語の「ゴマフアザラシ」(模様-PROP)。このとき、「N-PROP」全体が 1 つの派生語として働き、N 自体 (この例では「模様」) はもはや自律性を持たない。一方、PROP が付加されても依然として N を意味のないし形態的に取り出すことが可能なことがある。一般言語学的には、語を構成する要素の一部のみに適用されるような統語的操作は不可能であるとされる (語の形態的緊密性¹⁰)。しかしながら、N-PROP の N に対しては、修飾・照応・複数接辞付加が可能であることから、一般的な派生のプロセスとは異なる特徴を示すと言える。

(a) N への修飾

N-PROP 全体ではなく N だけを意味的に修飾する例がある。ユカギール語・エウエン語・モンゴル語・サハ語では、N の前に修飾語を置くことが可能である。モンゴル語・サハ語ではさらに、形動詞節による修飾さえも可能である。アリュートル語では、語幹合成による N への修飾が可能である。

(b) N への照応

ユカギール語では、指示詞による照応の対象として、N を意味的に取り出すことが可能である。

(c) 複数接辞付加

モンゴル語・サハ語では、N に複数接辞を付加し、さらにその外から PROP を付加することが可能である。つまり屈折接辞の 1 つである複数接辞の外側に PROP が付加されることとなり、PROP には普通の派生接辞には見られない特徴があることが指摘できる¹¹。

3.7. 欠如を表す形式

欠如を表す形式は PROP 同様に名詞から形成され、意味の上では PROP と対称的關係である。しかし、その形態統語的振る舞いには、以下のような PROP との非対称が見られる。

(a) 形式

PROP の形式は、アリュートル語の G 形を除き単一形態素である。一方、欠如を表す形式は、モンゴル語の *-güj* を除き複数の形態素から成る。モンゴル語では、PROP が語幹との母

¹⁰ 語の形態的緊密性 (lexical integrity) とは語の一部のみに統語規則を適用してはならないとの考えである。例えば Lapointe (1985: 8) は簡潔に “no syntactic rule can refer to elements of morphological structure” と定義する。

¹¹ ただしモンゴル語の複数接辞を屈折接辞ではなく派生接辞であると分析する研究もある。本稿ではこの問題には立ち入らないことにする。

音調和を示すのに対し、欠如を表す形式-*gij* は母音調和をしない（そのため、-*gij* が接辞であるか否かについても今後の検討を要する）。

(b) 付加される要素

サハ語では、PROP が人称代名詞や指示詞には付加されないのに対し、欠如を表す形式は人称代名詞や指示詞からも形成される。逆に、PROP が人名名詞に付加されるのに対し、欠如を表す形式は人名名詞からは形成されない。

(c) 用法

エウエン語では、PROP が付加された派生語は副詞句用法を持つが、欠如を表す形式は具格接辞を付加しないと副詞句としては用いられない。サハ語では、PROP が抽象名詞に付加された場合には副詞句として用いられないが、抽象名詞から形成された欠如を表す句は副詞句としても用いられる。

4. 結論

本特集では、北東ユーラシア地域に分布する諸言語の所有を表す接辞について考察した。本特集で取りあげた 5 つの言語では「持っている」にあたる動詞がなく、所有関係を接辞付加により表す。5 つの言語における所有を表す接辞の表す意味は、単なる所有だけではなく、特別な含意（特別な N、N の豊富さ、現に所持）が見られる点でも共通している。所有を表す接辞は一義的には派生接辞と見なしうるが、単なる派生接辞との記述では捉え切れない用法も見られる。端的には、派生の語基に過ぎないはずの N が依然として自律性を有することがある。また、存在や随伴も表すことから、存在文や共格構文と意味的に競合することがある。所有を表す接辞とは対称的な意味を持つ「欠如を表す形式」が 5 つの言語すべてに見られるが、形態統語的振る舞いからは所有を表す接辞との非対称も示す。

本特集で取りあげた所有を表す接辞に良く似た接辞を持つ言語がある。北アメリカでは、エスキモー語には接尾辞-*ŋq̄x*が [Miyaoaka (1996: 353)], スライアモン語には接中辞-*hV*-があるという [Watanabe (2003: 495-499), 渡辺己氏の御教示による]。グルジア語には-*ian* などのいくつかの接尾辞があるという [Boeder (2005: 42), 児島康宏氏の御教示による]。Dixon 編 (1976) および Dixon 編 (2002: 140-141) によれば、オーストラリア原住民語の多くにも良く似た接辞がある。ウラル語族のサモエード語派では、ハンティ語の *instructive* と呼ばれる格接辞-*aat* や、セリクープ語の派生接辞-SIMA 等が良く似た機能を示す [Abondolo 編 (1998: 378, 572)]. Dumi 語 (チベット=ビルマ系) の *ornative* と呼ばれる格接辞-*mi* も良く似た機能を示す [van Driem (1993: 76)]。一方、欠如を表す形式に関して言えば、それを派生接辞として持つ言語は英語の-*less* やドイツ語の-*los* など枚挙に暇が無い。欠如を表す形式を屈折接辞として有する言語としては、ウラル語族の多く（例えばフィンランド語の-*tta*, ハンガリー語の-*talan* 等）に見られる欠格接辞がある。ケット語の *caritive* と呼ばれる格接辞-*an* も、欠如を表すという [Vajda (2007)].

本特集は、地域的な近接性と「持っている」にあたる動詞を欠く共通性を出発点として5つの言語を取りあげ、所有を表す接辞について記述したものである。同様の機能を持つ他の諸言語の接辞との対照も視野に入れつつ、ここで扱いきれなかった点も含めより詳細に研究することが今後の課題である。

略号

PL 複数 PROP proprietive PSN 人名

参考文献

- Abondolo, Daniel. (ed.) 1998. *The Uralic languages*. London/New York: Routledge.
- Dixon, R.M.W. (ed.) 1976. *Grammatical categories in Australian languages*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, Humanities Press.
- Dixon, R.M.W. (ed.) 2002. *Australian languages : Their nature and development*. Cambridge: Cambridge University Press.
- van Driem, George. 1993. *A Grammar of Dumi*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 橋本 邦彦 2010. 「存在と所有の間ーモンゴル語の存在文と所有文の意味論ー」『北海道言語文化研究』 8号, 105-127.
- Heine, Bernd. 1997. *Possession*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 風間 伸次郎 1999. 「アルタイ諸言語のいくつかにみられる所有／存在を示す一形式について」 *Altai Hakpo*. [アルタイ学報] 9号, 93-124.
- Lapointe, Steven. 1985. *A theory of grammatical agreement*. New York: Garland.
- 松本 亮 2007. 「エヴェンキ語の所有を表す接辞について」 京都大学大学院演習 配布資料.
- Miyaoka, Osahito. 1996. Sketch of Central Alaskan Yupik, an Eskimoan Language. Sturtevant, William C. (eds.) *Handbook of North American Indians. vol.17 Languages*. 325-363. Washington: Smithsonian Institution.
- Stassen, Leon. 2009. *Predicative possession*. New York: Oxford University Press.
- 角田 太作 2009 [1991]. 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版.
- Vajda, Edward J. 2007. Ket morphology. In: Kaye, Alan S. (ed.) *Morphologies of Asia and Africa. vol. 2*. 1277-1325. Winoka Lake: Eisenbrauns.
- Watanabe, Honoré. 2003. *A morphological description of Sliammon, Mainland Comox Salish with a sketch of syntax*. Osaka Gakuin University.

Semantic and Syntactic Analyses of Proprietary Affixes
in the Languages of North-Eastern Eurasia: Introduction and Overview

Fuyuki EBATA

(Japan Society for the Promotion of Science / ILCAA, TUFS)

This paper provides the introduction and overview for the special issue “Proprietary Affixes in the Languages of North-Eastern Eurasia.” The papers on five languages examine mainly the semantics of the proprietives as well as their morphosyntactic behaviors. The proprietives in common often imply such connotations as specialty of the possessee or possession at that very moment. Though the proprietives are derivational affixes, the base nouns still have their autonomy. The five languages have also abessive forms, which are semantically contrastive to the proprietives.

(えばた・ふゆき fuyuki@mtc.biglobe.ne.jp)